

があることから見れば、ここは鮮新期に於て既に海となつたことを證するものである。然るに對馬の動物は内地分子と朝鮮分子との混系から成るものなる故濟州島と九州との間が海となつた後も尙接續して居て朝鮮分子の南下したのもあれば九州分子の北上したのもあつて兩者の交通路となつたことを示して居る。この對馬を通じての内地と朝鮮との陸續きは幅が狭かつたことは其の時代に既に濟州島と九州との間は海となり又一方日本海も夫れから前に成立してゐたことから考へられる。日本海成生に關しては咸鏡北道吉州及島根縣那賀郡國分寺の第三紀鯨骨化石や江原道東岸の第三紀汀線によつて窺知される。故に此の交通路は地峽狀を成して居て、第三紀末の氣候の激變により朝鮮分子が南下し次に氣候が恢復すると共に九州分子が北上し未だ充分北上し終らないうちに臺岐と對馬との間が海となり、夫れより間もなく對馬と朝鮮との間が海となつたものと推斷される。而して内地が朝鮮から分離して島嶼化したのは矢部氏に従へば第三紀末又は洪積期の始めて敷島隆起時代の地塊運動によるとされる。これより類推すると、濟州島と九州との間の海は敷島隆起時代より以前乃至瑞穂沈降時代のものであらう。兎も角動物分布の近遠關係は朝鮮海峡に百米同深線を入れた地圖を見れば一層明かとなる。(N)

新著紹介

○古風土記逸文

栗田寛纂訂 大岡山書店發行
三圓五十錢、四六判三八六頁

故栗田先生の古風土記逸文は大正十二年の震災に絶版になつてゐたのを、今度大岡山書店で再刊するや、讀みをつけ、引用書目解題と索引とをつけた外に、猶二三の補遺が附加されて、富地博士の推獎の辭がのつてゐる。古典を研究する上からでなくて、我國の人文地理を研究するものにも、誠に必讀の古書である。予はこの書を出版した大岡山書店に敬意を表したい。(藤田)

Richard Ambrom: Methoden der angewandten Geophysik, 1926 ¥8.25

地球物理学の進歩は近年に於いて甚だ目覺しいものがある而して今や諸々なる機會は最早や試験の時代を過ぎて各種の科學に實際上の貢獻をなしつつあり、殊に重力偏差の測定や電氣探鑛法の如き實用の時代に入り我々の實生活に對してすら貢獻せんとして居る。本書は各科學の最近の進歩を記述する事な目的とせる高級なる自然科學叢書の第十五巻であつて地球の内部の構造が地表の重力に及ぼす影響、地磁氣の測定法、放射能及空中電氣の測定法、地球電氣の測定法、地震波に依る地球内部構造の研究及び地球内部に於ける溫度の分布と其の測定法に就いて、一々現象に對する理論と最近の測定

器械の使用法とを説明せるもので、例へば第一章に於いてはエートグエスの重力偏差測定器を掲げ既に本誌で松山教授が發表された鹿兒島灣北岸の地下の構造を推定する様な方法が稍々詳しく説明されて居る。單に一方面に於いて言つても此の理論を用ゐて此の外に炭層や石油層を探求せんとする事すら現に試みられて居る折であるから、地學や何等かの土木工學に關係ある人々が本書を一讀される事は決して價値なき事ではない。只本書を見ただけで器械を使ひこなす事が困難である事は本書が僅か二百五十八頁の小書である限り致し方無い所である。然し卷末に掲げたる千七百に近い參考論文の出所を示した表を研究者が利用せらるゝならば恐らく此の缺陷からは完全に逃れる事が出来ると思ふ。(H)

OR. H. Rastall: Physico-Chemical

Geology, 1927. 頁 8.00

本書は地質學及礦物學の一通を知れるに對して火成岩、火成岩造岩礦物、變成岩、風化作用、岩鹽、鑛床、窯業及び膠質の物理化學を述べたもので、始めの九十頁は主として化學平衡、溶液及び固溶液に對する種々なる現象を順序を追ふて理解し易く述べて居る。此處に掲げた地質學上の事實は此の後に單に物理化學的に説明されて居る。例へば第五章の火成岩に就いて言へば、火成岩の化學成分、二種の主なる火成岩(アルカリ岩とカルクアルカリ岩)、火成岩の肉眼的及顯微鏡的構造、杏仁狀構造、斑狀構造、花崗岩の冷却、火成岩の分

化、分化の原因、分化の實例、分化と鑛床等の各項を分けて居る。此の中斑狀構造の如きに對してなか／＼有益な暗示がある。

本書は其の表題の上から見ても又内容から言つても勿論地質學の書として見る事が出来ないし且つ主題が多少斷片的ではあるが、形式を整へる事を目的とせず著者が書人とする事を書いてある點に於いて強みがある。殊に始めの九十頁の一般的解説がある爲め、其の必要を切實に感じながら比較的物理化學の基底が淺い一般の地學研究者にとつては良き書物である。又應用地質學の理論に對して著者が可成注意された事は本書の一の特徴としなければならぬ。(H)

雜報

『デーリー』報 Our Mobile Earth の本間氏譯

本を讀む

神津 傲 祐

私の助手である高根理學士が、『デーリー』著 Our Mobile Earth の本間理學士譯本を持つて來て、自分は讀んで見たが大變良く出來て居るから私にも是非一讀してほどこふかと勧めました。私は原本があるのに特に譯本を讀む氣にもなりませんでした。高根君の言ふ所を聞き、私に一讀を勧むる理由が面白いので、其れなれば私も讀むからと高根君の本を借りて讀んだ次第です。